

開館前

美術館では午前9時30分の開館以前に、さまざまな人が開館の準備をします。警備員による巡回のあと、清掃作業があり、その後9時頃から展示室入口の防火シャッターが開かれスポットライト等が点灯、設備の異常がないかの点検がおこなわれます。そして9時15分頃になるとエントランス・ホールでは監視員による本日の予定確認と打ち合わせがあり、一方でボランティアの方々が美術館に常備している車椅子の空気圧を点検するなど細かくて重要な来館者サービスがカバーされます。

この一連の準備のなかで、リニューアル開館後から辛うじて継続していることがあります。それは、展示室の点灯から開館までの30分間、展示室の点検と同時に作品のメンテナンスをすることです。点検の項目としては、額やキャプション(作者と題名が書かれたプレート)の傾きがないかどうか、作品がしっかりと固定されているかどうか、作品に汚れやホコリがついていないか、周囲に害虫がいないかなどです。そして、少しずつですが30分以内に額や彫刻作品のクリーニングをします。それまでは一切やっていなかったわけではないのですが、しごとの忙しさを理由に差し迫った場合にのみ限られていました。では、なぜ継続できているかというと、ひとつにはメンテナンスの時間が短いために無理なくできるということです。それともうひとつ、とても反省させられたことが背景にあります。増改築の工事中、主要なコレクションは愛知県美術館に預かっていただき、愛知県美術館の常設展示室には三重県立美術館のコレクションがいくつか展示されていました。その展示室を訪れて真っ先に感じたことは、愛知県美術館のコレクションは非常にメンテナンスが行き届いているということで、比較しないとその差が歴然としなかった。自分にとってはかなりショックな出来事でした。その場で顔が真っ赤になりました。



メンテナンス・メモ



メンテナンス道具

当然のことですが、良い作品は必ずといっていいほど隅々にまで作者の神経が行き届いています。展示の場である美術館は、その作品の品位を損なわないよう、また、来館者の方々が日常生活から離れ気持ちよく鑑賞できるようにつとめなくてはなりません。

毎朝、全体の点検は石崎学芸員がおこない、こまかなメンテナンスは自分がおこなう。額の裏蓋をはずさなくてはならないときには通りがかった石崎学芸員に応援を頼む。もちろん時間のかかる補修やクリーニングは、その作品が展示されていない、別の機会におこないます。

ズボンのうしろポケットには柔らかな刷毛、左手には綿の白手袋、メンテナンスの道具が詰まったショルダーバッグを斜め掛けした姿は決して格好のいいものではありませんが、我が子のように感じる美術品の健康診断と手入れに、今日も展示室へと出動します。(Ty)